

「ちょっと変な日本人がいるの。ねえ、それとなく様子を見ててくれない？  
だめかしら。お願い、お願いするわ。」

「えっ？」

□

僕はイタリアでの旅行で身も心もぼろぼろだった。  
やはりあんな形であの二人と別れることになるなんて、出発前には考えてもみないことだった。

□

僕はパリから列車で二時間、ロアール地方のTOURSという地方都市にあるフランス語の学校に通っていた。もちろんTGVなどない時代だ。けれど適度にパリに近く、何か宣伝文句のようだけれど、きれいなフランス語を話す地方だと言われていたこともあって、多くの外国人がフランス語を学びに来ていた。  
その中にはもちろん大勢の日本人もいた。僕のような学生もいれば、企業からの派遣組や、外務省の職員と言った公務員も多くいた。

その年の秋、僕はこの町にやって来て、この学校に入り、そしてふとしたことから知り合った一人の日本人女性に恋をしていた。  
年が同じだった。フランスに来て間もない頃、困った僕を助けてくれた。クラスも同じで、そしていつも一緒だった。  
好きだった。 本当に好きだった。

そんな彼女と冬休みにどこか旅行に行こうということになり、

「ねえ。イタリアに行かない？」  
「うん。いいねえ。そうしよう。」

話はすぐにまとまった。  
けれど金のない学生だからかなり切り詰めて、節約、節約の旅行にしようと決めた。  
でもそんなことはどうでも良かった。僕は彼女と旅行できることだけで満足だった。

けれどじゃまが入った。やはり同じ頃にTOURSに来た、同じ年の日本人の女性が、  
「私も一緒に行く。」と言い出した。  
別にその子のことは嫌いではなかったけど、下心のある僕としてはとんだおじゃまむしだった。けれど、彼女は、  
「いいわね。一緒に行きましょう。ボディガードもいることだし安心よ。」だって。  
かくして男一人、女二人のイタリア旅行が始まった。

最初はわきあいあいとそれなりやっていたけれど、それがミラノ、フィレンツェとくるうちに僕と彼女たちの関係はきまずくなっていった。毎日何か簡単なものを買ってきては安宿の部屋で食事を取ったりとか、立ち食いの四角いピザで済ましたりとか、ろくな食事もしなかったから、そんなフラストレーションもあったのかもしれないけれど、やはり僕の恋心がもう一人のあの子の機嫌をそこね、僕の好きな彼女を誘って僕から離れていこうとした。

フィレンツェの最後の朝、いつも一緒に三人で朝食をとっていたのが、別のテーブルで離れて席に着いた。そして何も言ってくれないまま、そのまま彼女たちはどこかへと行ってしまった。小さな食堂を出るとき、彼女は僕に一度振り向いて何かを言おうとしたけれど、もう一人のあの子に腕をとられて見えなくなってしまった。

僕は一人ヴェニスに向った。クリスマスイブだった。

冬のヴェニスは素晴らしくきれいで、クリスマスのイルミネーションに彩られた夜の町はロマンティックだったけれど、僕は一人立ち食いの四角いピザをほおぼりながら、道行くカップルをうらやましげに見ていた。

さみしかった。厳寒の中僕はいつまでもいつまでも小さな橋をいくつも渡りながら歩き続けていた。

□

「だからネエ、ちょっと変なのよ。パスポートも持ってないって言うし、それが盗られたっていうんだけどね。でも宿代は前金でちゃんと払ってくれたの。だからそれはいいんだけど....でもね、見ればわかると思うんだけど、ちょっとなんていうか.....

まあとにかくそれとなく気にしててくれない？部屋はあなたの二つとなりだから。ねえ、お願いね。」

ホテルのマダムは僕に鍵を渡ししながら、一方的にこう話した。

この一つ星のホテルは僕がフランスに来て初めて泊まったホテルで、以来パリに出てくると必ずここに泊まることにしていた。何より36フランと値段が安いし、地下鉄のオデオンの駅から数分のところにあった。エレベーターのない最上階の部屋はもちろんシャワーもない。ものすごく狭いけれど、窓を開けるとカルティエラタンの街が見下ろせて僕は気に入っていた。ごちゃごちゃとした街の喧騒もなぜか心地よく感じられる。

そしてこのホテルのマダムも一見そっけなく無愛想だけれど、根はひどく人のいいパリジェンヌだった。何度かくるうちに僕のこと覚えてくれて今ではすっかり顔なじみになり”常連”として接してくれていた。

「う～ん。いいけどさあ。でも....」

そのとき右手の階段から人が降りてくるゆっくりとした足音が聞こえてきた。

「あっ、来たわよ、あの人よ。あの人。ねっ、お願い！」

ちよつとの間をおき、足音の主が現れた。

髪はぼさぼさの長髪。長く伸びた髭が顔一面を覆っていた。黄色のかなり年季の入った長いダウンのコートを着ていた。ずんぐりとした体躯だった。

確かにマダムが怪しく思うのも頷ける。

その時、彼が突然僕にまっすぐに顔を向けると声をかけてきた。

「やあ。日本の方ですか。そうですねえ。こんなところであったのも何かの縁ですからよかったらちよつとぶらっと外に出ませんか。」

なんだ、なんだ、なんなんだ。  
いきなり唐突にこんなこと言うかなあといぶかった。

「僕、今着いたばかりなので。まだ部屋にも入ってないし……」

「そうですね。一度部屋に荷物を置いてらっしゃい。ここで待ってますから、ね。」

「ああ。まあ。」

困った顔をしているとマダムが目配せをした。

『気をつけなさいよ。』と言っているようにも思えたし、  
『ちよつと一緒に出かけ探ってみて』と言っているようにも伺えた。

けれど僕を見つめる彼の瞳には何か不思議な輝きがあって、僕は彼とぶらっとパリの街にでてみたいと直感的に感じた。  
それはたんなる興味本位という言葉では言い表せない奇妙な感情の高まりであった気がする。どうしたことだろう。

「わかりました。ちよつと待っててください。荷物置いてきますから。すぐ降りて来ますからね。」

そう言うと僕は何段もの階段を、さして大きくないバックを持ちながら屋根裏部屋へと駆け上がっていった。

□

「えっ？警察？」

「そう。パスポート盗られてね。でも盗った奴は知ってるんだよ。まあ鬼ごっこみたいなものだなあ。はっ、はっ。」

「????」

「まあ、とりあえずきのうは警察行ってきたわけ。でも戻ってくることはわかってんの。まあ、ゲームみないたもんさ。オレと奴の。さてと、どこか公園でも行こうか。」

そう言うとパリは良く知らないと言いながら、ノートルダムを右手に見ながらセーヌを渡るとチュイルリー公園まで僕を連れてきた。

「ここは広くていいねえ。ちょっと休もうか。」

「そうですね。けっこう歩きましたものね。」  
そう言うと僕たちはベンチに座った。

僕は小さなリュックサックからりんごを取り出すと、それを二つに割り彼にその一つを差し出した。

「ああ、ありがとう。」

「いえ。節約しようと思って、食事は時々りんごだけで済ますもんだから。昨日までのイタリア旅行でもりんごをかじって歩いていました。」

「う～ん。いいね。そういうの。」

そう言うと彼はうまそうにりんごに噛り付いた。

きっと僕と同じようにそんなにお金もないだろうからと思いながら、僕もりんごを口に入れた。そして昨晚のことを思い出していた。

□

イタリアでの最後の晩はトリノで過ごした。それまで節約、節約できたからリラが思ったよりあまったので、それで最後の晩ぐらい豪勢にやってやれとばかりに、それでも一番安そうな”食堂”をみつけ、僕以外一人しか客のいないその小さな店で、まずパスタを頼み、肉の塊を頼み、そしてまた別のパスタを頼み、そしてカツレツみたいなものまで平らげた。何かうっぷんを晴らすかのように貪り食った。それを見ていた店のオヤジは喜んで、野菜のスープやデザートやらいろいろと「食べ食べ、

これはおごりだ。」と言って嬉しそうに持ってきた。

そんな様子をこれまた見ていた僕以外の唯一の客が、僕のテーブルにやって来て、

「よく食うな。中国人か？」

「いや、日本人だよ。」

「そうか。日本人か。いやおれは一応ミュージシャンなんだけど、来月からホンコンのナイトクラブで一ヶ月仕事なんだ。そうか。ニホンジンか。奇遇だな。オレもホンコンに行くし、でもってホンコンからトウキョウまで汽車で何時間ぐらいかかるのかな。一度ホンコンにいる間にいくつもりだぜ。」

その後はこのミュージシャンという男の家に無理やり連れて行かれ、彼の”パピヨン”という名のバンドのテープを聞かされ、そしてワインやらチーズなんか出してきて、でも酒が飲めない僕はこれまた生ハムとチーズをたらふく食って死にそうになりながらパリ行きの夜行列車に乗ったのだった。

□

りんごを食べ終わると僕たちはパリの街をあてもなく歩き回った。

歩きながら僕は自分のことを話し、彼は自分の名前を名乗り、ニューヨークのことやロスの話とか、そんなアメリカの町の話をした。なぜアメリカに詳しいのか言わなかったし、自分の職業に関しても何も話さなかった。そして僕もあえて聞こうとはしなかった。

どんよりとした鉛色の雲に包まれたその日のパリは恐ろしく寒かったけれど、僕たちはただただ何時間も歩き続けた。

僕は時折、イタリアで別れた彼女のことなど考えていた。

フランスに来てまもなくの頃、祖父の急死で日本に帰り、またすぐにフランスに戻ってきたことがあった。その時TOURSにもどる前日、パリで泊まったホテルの部屋が偶然今日入ったあの部屋だったからだ。

あの時は、早くTOURSにいる彼女に会いたくて、あの部屋で眠れぬ夜を過ごした。そんなことを思いだしていた。

陽が暮れてきた。僕たちはいつの間にかまた左岸に戻っていた。

一度ホテルに戻って食事に行く約束をした。僕は知っている限りの安い店を思い浮かべて、その晩に備えていた。

□

ロビーなどと呼ぶにはあまりに小さい貧弱なホテルの一階で待っていると、Mさんがゆっくりと降りてきた。

昼間と同じように少し色あせた黄色のダウンコートで、その襟元からは、淡いトーンのレインボーカラーのざっくりとしたニットが見えた。

「どこに行きましょうか？ なにか召し上がりたいものとかありますか？ よかったら少し知っているところがあるので僕が.....」

「いや、俺が誘ったんだからまあ任せてくれよ。なあ。」

そういうとすたすたとホテルから出て行った。

しばらく行くと店頭にながの牡蠣などを並べたレストランが軒を連ねていた。

何軒目かでMさんが牡蠣を覗いていると、牡蠣の殻を剥いていた職人があっちへ行けと言わんばかりに手で僕たちを追い払おうとした。

確かにMさんのコートはおせいじにもきれいではないし、髭ぼうぼう、髪ぼさぼさだけれど、さすがの僕もこれにはむっとして何か言ってやろうかと思ったら、Mさんが僕を制しておもむろにポケットから札を何枚か出し、その中から500フラン札を渡すと、

「この分の牡蠣を」と相手の目をじっと見据えて日本語で言った。

牡蠣売りはすぐ事情を察し、急に愛想笑いを浮かべると、上等の牡蠣を山ほど袋に詰めて「まいどあり。」と言ってMさんに渡した。

それを受け取るやいなやMさんはその牡蠣の入った袋を地面に叩きつけた。

牡蠣売りが唾然としてしているのを尻目にMさんは、「行こう」と言ってゆっくりと歩き始めた。そして「子供じみた真似をして悪かった。」とぼつりと言った。

しばらく歩くと、一軒の店の前でMさんの足が止まった。

「ここにしよう。」 そう言うとその中華とベトナムが混ざったような店に入っていった。

「知っているんですかここ？」

「いや。でもここは間違いない。」

「.....」

「好き嫌いはあるか？」

「いえ。何でも大丈夫です。アルコール以外なら。」

「そうか、飲めないのか、まあいい。注文は任せてくれ。」

そう言うとまずワインを注文した。相手の目をしっかりと見据えて日本語で料理の注文を始めた。不思議なことにそれはどんな流暢なフランス語より威厳のある注文の仕方、店のギャルソンも平然とそれに答えていた。

僕が驚いた顔をしていると、「なにごとくもあせらないことだ。物にはすべてタイミングがある。”間”が大事なんだ。”間”をうまく知ることが生きることだ。」とまた忽然と言った。

「???'」

「さっきはちょっと大人気なかった。反省してるよ。」とちょっと笑みを浮かべると、

「なあ、例えば街を歩いているとしよう。すると突然、油のように脂っこく迫ってくるものがある。そしてしばらくすると急にあっさりとしてくる.....こんなところがある....。これがいい”場所”なんだ。」

「???'」

注文したワインが出てきた。彼は一口くちをつけるとこう言った。

「ワインを先に注文する。それによってその人の人格がわかる。」そう言ってニヤッとした。

料理が運ばれてきた。箸をつけると、確かにMさんのいうようにこの料理は確かにおいしかった。蟹のつめ、蛙、どれも今まで口にすることがないおいしさだった。さっき言ってた”いい場所”ってこの境界のことを言いたかったのだろうか。

そして食事中、Mさんの突然の発言に、僕は頭の脳みそをこねくりまわしていた。

「”爛か”って知ってるか？」と言ったかと思えば、

「生と死の間に何があるか。それがわかったとき人生がわかる。」

デザートに杏仁豆腐に似たものが出てきた。これがまたとびきりの旨さだった。

そして店の主人と思しき人がやって来てマオタイ酒を「これは店からです。」と言って振舞ってくれた。

「飯を食うことは最高の芝居だ。エンディングとしては最高だっただろう？」  
そう言ってMさんは僕に微笑んだ。

楽しくも不思議な世界にいたような食事が終わって僕たちは外に出た。  
冷気が肌を刺し凍りつくような夜だったけれどなぜか気持ちは晴れやかだった。

「あのう、ご馳走になっていいんでしょうか？」

「あたりまえさ。りんごのお礼だぜ。うまかったなあ、あのりんご。」  
そう言うとウィンクしてみせた。

□

僕たちはムフタル通りをゆっくりと上がって行った。ゆっくりとゆっくりと空を見上げたりしながら食事の余韻を楽しむように歩いた。

そしてしばらくするとパンテオンが見えてきた。  
すると、突然Mさんが言った。

「もう少しだ。もうちょっとするとあの大きな建物のてっぺんが光るからな。見てるんだぞ。」

「えっ？」

「いいから、ほらっ、ほら今だ！！」

「わっ！ 」 光った。 パンテオンが光った。

雲のと切れから一瞬光が差し込み、パンテオンのドームがパチパチと光ったのが確かに見えた。

僕は口も聞けずとなりのMさんをみると、彼は目を細めてパンテオンを仰ぎ見ている。

□

ホテルに着いた。僕は少し興奮していた。 『なんでパンテオンが光ったんだろう。』

長い階段を僕たちはゆっくりと屋根裏部屋まで上っていった。

部屋の前に来ると「ちょっと寄ってけよ。」 そう言ってMさんは僕を部屋に招き入れた。

天井の低い小さな部屋の小さなテーブルの上に一枚の写真があった。

「これは...」

「ああ、女房。それと横にいるのはニューヨークで一番といわれている腕利きの外科医。」

僕はその奥さんの写真に見入ってしまった。今と同じような格好のMさんと外科医に挟まれたその女性は若くて飛び切りの美人だった。

『いったい、Mさんて なんなんだろう』

Mさんは屋根裏部屋の窓を開けた。冷気と共に遅くまで人の多いこの辺りの街のざわめきが下の方から聞こえてきた。

「なあ、これやらないか。」と言ってMさんがリコーダーを出してきた。

「やろうぜ。」

そう言うとりコーダーで何かジャズを演奏し始めた。うまかった。でも隣の部屋の客にどなられやしないかと心配になったけど、なんとなくそんなことはどうでも良くなってきて、

「僕にもやらせてください。」

そう言ってぼくも窓から上半身を乗り出してリコーダーを吹いた。もちろんジャズなんて吹けないけれどリコーダーは嫌いじゃなかった。たしか中学のとき音楽の時間で習った”ロマンス”という曲だっけ。

「やるじゃないか。」そう言ってMさんは嬉しそうだった。

こうして僕たちはしばらくの間、真冬のカルティエラタンの屋根裏部屋でリコーダーに興じた。そしてMさんはまた独り言のようにつぶやいていた。

「音楽はすべて問答だ！ 後ろに大きな山があり、前に小さな山があり問答を繰り返していく.....」

□

翌日、僕はTOURSに帰る。僕はMさんに、ぜひTOURSに遊びに来てくださいと誘った。

そして「いつまでフランスにいるんですか？」と聞くと答えはこうだった。

「鬼ごっこが終わるまで。」 そう言って笑った。

僕はTOURSへの行き方と連絡先を詳しく教えるとMさんとホテルで別れた。

そして数週間後、Mさんは本当にTOURSに来てくれた。

僕は連絡を受けてから何日もかけて小奇麗で安い宿を何件も見てまわり、そしてMさんのために小さな旧市街の居心地のよさそう宿を決めて待っていた。

けれどTOURSに着いたとたんMさんは高熱を出し数日間ホテルで寝たきりになってしまった。僕は日本から持ってきた風邪薬や、新鮮なフルーツなどを毎日届けて看病した。

ようやく熱も下がり動けるようになったとき、ニューヨークに行かなくてはならないからと帰り支度を始めた。

どうやら”鬼ごっこ”はけりがついたらしい。Mさんのフランス滞在は終わりを上げようとしていた。

僕はきれいなお城なんか見せたかったけれどそれもかなわず、TOURSの駅に見送りに行った。

「これ、俺の日本の連絡先。日本に帰ったら必ず連絡くれよ。」 そういって電話番号の書いた小さな紙切れを僕によこした。

「もちろんです。必ず、必ず連絡します。」

僕はまた大切な人とめぐり合った。

そして今また”さよなら”を言おうとしている。

特急電車に接続する二両編成の短い車両に乗り込んだMさんに、僕はいつまでも手を振った。

それから2年余が過ぎ、僕は日本に帰国した。決して望んだ帰国ではなかったけれど、家の事情で帰らざるをえなかった。

でも日本に帰ったら真っ先に会いたい人がいた。Mさんだ。Mさんと過ごしたパリの一夜は、月並みな言い方だけどまるで夢のようなひと時だった。

『また会いたい。』

僕はTOURSの駅でもらった番号に電話をかけた。

「はい\*\*\*です。」静かな男の声で何か店の名前のようなことを言った。

「あとう、Mさんはいらしゃいますでしょうか.....」そう言い事情を説明した。

「しばらくお待ちください。」とって電話の声は女性に変わった。

Mさんの奥さんだった。僕はパリで知り合いお世話になった、そんな出会いをかいつまんで話すと、彼女の声が一変した。

「ここは東京の\*\*\*\*なのですが、いまからこちらにいらしゃれますか。」  
という場所の説明をしてくれた。  
何か変な感じがしたけれど僕はすぐに行きますと答えた。

教えられた場所に着くとそこはジャズクラブのようなところだった。  
僕は黒い服を着たていねいな男性に案内され奥に通された。数分待たせようか。あのパリで見た写真の綺麗な女性が現れた。

「どうも、パリに行った話しは聞いていました。主人がお世話になって。」

「いえ、世話になったのは僕の方です。Mさんはご不在ですか？」

しばらくの無言。そして、

「いえ.....主人は..... 亡くなりました。先日ニューヨークで.....」  
最後は泣き声で聞き取れなかった。

僕は言葉が出なかった。  
なんでも事故だったらいい。そして今日がそのお別れの会の当日だったのだ。

奥さんに案内され奥から店内に入ると、花に囲まれてMさんの遺影が飾られていた。

そして名だたる日本のジャズメンやら大勢の人がMさんとの別れに集まっていた。

Mさんはこのクラブのオーナーだったのだ。

そして友人代表で追悼の言葉を述べた人の話で、Mさんと僕とは同じ中学、高校だったことがわかった。

なにか目の前が真っ暗になったようで僕はしばらくのあいだ何も考えることが出来なかった。

長くはその場所にいられなかった。いやいたくなかった。

ずっとあれから会いたかったのだ。

僕は遺影に手を合わせると、奥さんにお悔やみの言葉もそこそこに外に出た。

息が苦しかった。

「いつかパリでの話しを聞かせてくださいね。」と帰り間際に奥さんは僕に言った。

□

待ち合わせで有名な喫茶店のある交差点のところで、僕はこらえることが出来なくなった。大粒の涙があふれ出た。

その涙の一粒一粒に街のネオンが反射した。

しかしそのネオンの輝きはその日あの夜のパンテオンの光には遠く及ばない、そんなあたりまえのことを僕はいつまでも反芻していた。

”さよなら”は言いたくなかった。

いや『さよならは決して言わない』と僕は目の奥に焼きついているあのパンテオンの光に誓った。

\*すべてフィクションです。仮に登場人物など実在の者と酷似していたとしてもそれはまったくの偶然に過ぎません。